

## 北方洋学思想史—南部盛岡と箱館—（1）

藤 原 暹

洋学は長崎における通詞蘭学から江戸における本格的な翻訳学に移行したと言われ、その時期は18世紀後半であったと言われている。しかもこの18世紀後半には北からのロシアの南下に対する危機感が起り洋学的知見をベースにした經世論が生まれてくる。

いわば、語学的研究を通してその西洋に対する情報、見解などを基底部分としながら、現実の日本の政治経済状況への反省と改革意見が登場してくるのである。

ところで、長崎港のみが外国に対して開かれていた段階（鎖国体制・制限交易）からペリーの来航に伴い開国・自由貿易を目指して下田、箱館が開港されてくる段階は当然のごとく洋学においてもことなつた經世論が登場させてくる事が予想される。

新たな北からのロシアの進出に対して、南からイギリス、アメリカ、フランスの進出がありかかる国際的舞台の中に「北方」はまた入らざるを得なくなってきたからである。

本稿はかかる視点から北方の洋学を考察してみようとするものである。

（なお、筆者はこの紀要に新渡戸稲造についての論稿を掲載していたが、改めて本稿の構想の中に新渡戸三代を位置づけてみたいと考えている。）

### 一、林子平の『海国兵談』における北方問題の把握

大島高任は後に「奥羽は蝦夷の鎖鑰、蝦夷はロシアの鎖鑰昇平無事といえども防備嚴重に御座なく候ては、必ず不慮の患これあるべく候」<sup>(1)</sup>と、盛岡—箱館を一つのブロックとして把握してくる

林子平が早く北方からのロシア進攻の危機を唱え海国日本の防禦論を提唱した事は周知の通りである。では子平では、北方の脅威に対して如何に捉えていたであろうか。

「海国なるゆえ何国の浦にも心に任せて船を寄せることとなれば、東国なりとて曾て油断は致されざる事」<sup>(2)</sup>と、どこからでも日本は侵略される危険性があると言う。それに対して長崎には「石火矢」の備があるが、安房相模にはないし、瀬戸内海にもない。「江戸の日本橋より、唐阿蘭陀迄境なしの水路」であるから急いで備え付けの必要があるとした。（また、清とロシアが親交して日本を侵略するかも知れないとも危惧した。）

その防禦態勢として、彼は「広くいう時は諸侯の国々は江戸の屏…吾藩を以て云時は笹谷、柵並、尿前、相去、等は險也。角田、白石、岩手、水沢、宮古、等は屏地」<sup>(4)</sup>といている。これは幕府・江戸、藩・仙台中心の防禦態勢である。けつして北方そのものを生活のベースとして守ろうという意味での北方中心主義ではない。

(1) 「藩政大革命に関する上申書」『大島高任實』大島信藏編 昭和13 412頁

(2) 『海国兵談』村岡典嗣校訂岩波文庫本 1987 17頁

(3) 同上 18頁 (4) 同上 143頁

(また、ほぼ時を同じくしていた經世論家本多利明は林子平の軍事的関心とは異なって産業交易振興論者であったが、その貿易都市構想をみると「日本の天下第一の最良国となるべき所謂」<sup>(5)</sup>は「カムサスカの土地に本都を遷し西唐太島に城郭を建立し、…山丹、満州と交易して」<sup>(6)</sup>というが、これもそうならば、「東都の御威光も盛んに成る」という江戸・幕府中心都市の経済防衛態勢として構想されたものであった。また彼は消費都市江戸の生活消費物質の欠乏に一つの危機を抱いていた。)

この子平の態度(利明の場合も同じであるが)は防禦の方法論にも影響を与える。

彼は水戦においては、第一に「阿蘭陀及び歐羅巴諸国の…制作甚堅実廣大」<sup>(7)</sup>なる「船」が必要であるという。この「船」は互いに堅実な構造をもつ敵を「相互に砕く為の具」である「大銃」を搭載している軍艦である。次は、こうした軍艦が日本海岸を攻撃してきた時これを砕く大銃(石火矢)を沿岸に配置する事であった。これらがたとえ備えられたとしてもそれを「操練」する為の「惣兵士」への教育が必要になる。その為には「文武兼備大学校」の建設が構想されそこでは陸上戦の訓練と共に水戦の訓練に必要な施設を付属させる事を夢想したのであった。(水練舟楫等稽古場を含み200間×300間の広さ)このような新しい海戦に対する改革論の中で城制改革も述べられている。「阿蘭陀流域城池図」<sup>(8)</sup>を参考にして「郭外二人家一宇モナ(い)」<sup>(9)</sup>形にして、その外郭は「惣川」に対して配置され更に外壁には石火矢の設置を重視している。(図A)この「惣川」を「惣海」に置き換えれば日本海岸周辺にかかる新城塞をもって囲むという発想にも拡大はするであろうが、子平は現在存在している城下町構造自体を大きく変革するという考えは述べていないようである。また、彼の文武兼大学校も本来の趣旨に従えば沿岸都市に新設する方が良い訳であるがそのようには必ずしも述べていない。

子平の改革意見は現存の武家・軍事体制はそのままだにその上に新しい西洋的要素を付加していくというものであった。(彼は、同じ『海国兵談』で城下町における武士の消費生活よりも古い武士土着生産論に還るべきであると述べている。これとも関連しているであろう。なお、武士土着論や兵学などに荻生徂徠の影響を受け入れている点については既に別に拙論<sup>(10)</sup>がある。)

子平における武士土着農業生産論(自然経済的発想)と新しい西洋軍事的要素との関係は彼をして資本主義的発想の方には展開させないものであった。(この点で工藤平助は交易中心主義を採り、ロシアとの交易開始を含んだ積極的開国の意見であり、蝦夷地開業論にも繋がった。)

こうした子平の思想的特色からもう一度彼の意見を振り返ると興味ある事項が浮かんでくる。

1) 西洋的要素の導入を必要とするならば、当然西洋語に対する関心が起こるものであろう。『海国兵談』にあるオランダ語は僅か以下のものである。

『海国兵談』に見られる外国語例(地名、人命を除く。岩波文庫本使用)

頁数	表現	
10	ゼネラル	城代ノ事也
22	グレイキスフック	歐羅巴坂の武備
32	グレイキスフック	

(5) 『西域物語』岩波・日本思想大系 44 1970 所収 133頁

(6) 同上 134頁

(7) 前掲『海国兵談』20頁

(8) 同上 148頁 (9) 同上 149頁

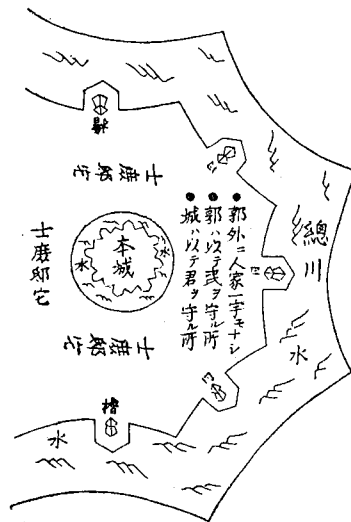
(10) 「林子平の海防国家像—徂徠兵学・蘭学との連関—」『日本思想史研究 2』東北大学文学部 昭和45

45	リュクドシキップ	気で乗る船と云事
46	ゲレイクスブック	
60	シキップト	船
々	バツテイラ	伝馬船
々	オップルホウフト	カピタン
々	シケツプル	船頭
々	オップルステルマン	按針役
68	ケレイクスブック	
69	シケルド	
132	ラツパ	喇叭
147	ゲレイクスブック	
160	ゲレイクスブック	
177	ゲレイクスブック	
198	ビロウト	天鷲

17箇所中7箇所はゲレイクスブックという蕃書名である。子平はこの蕃書について直接見たのであろうが、その原文に立ち入って理解したのではなからうし、また彼にその意欲があったとは考えられない。なお、唐船に関して「船主 センシュウ 夥長 ホイチョウ 惣官 ツオンクハン」など若干の中国語が紹介されている事を付け加えておく。

これをやはりほぼ同じ時期の司馬江漢と比較すると、江漢の場合は「江漢西遊日記に録された外来語」という論文<sup>(11)</sup>が早く見られるように外来語に対する関心が深いのである。この外来語に対する関心の違いから子平の文武兼備大学校(図B)<sup>(12)</sup>において外国語学教育は皆無なのである。2. 文武兼大学校には文庫(図書室)や天文台などが構想されていて、図書室には「蕃書」も備えられるように構想されているが、この点についてもどの程度まで蕃書の学習(和蘭翻訳学)を考えていたのか疑問なのである。

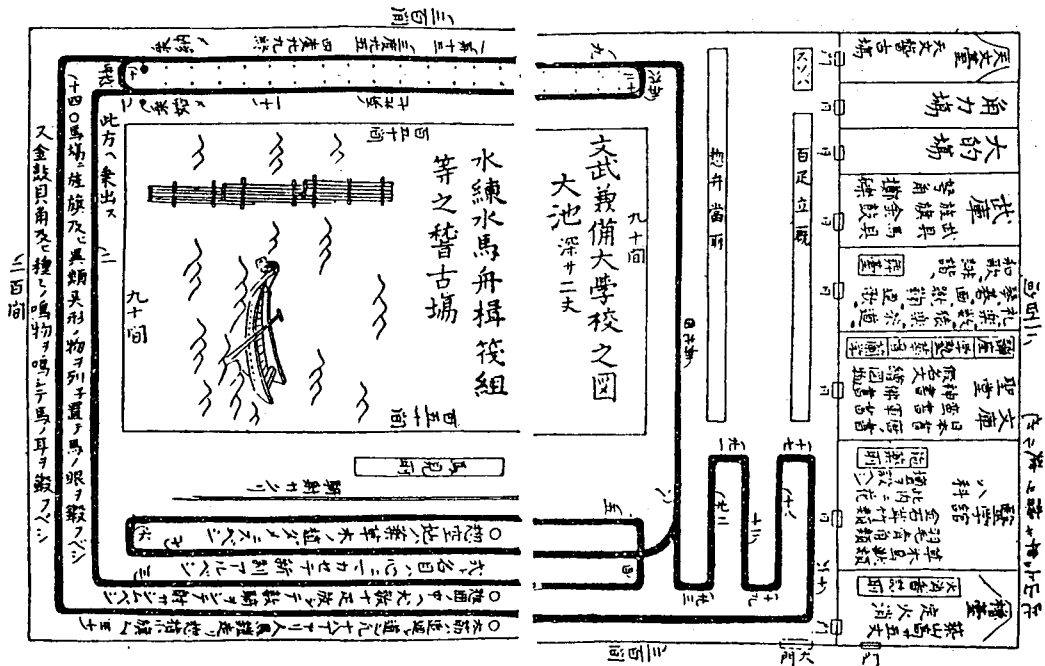
A



阿蘭陀流城池之圖左之如シ。

(11) 重久篤次郎論文『外来語研究』各著普及会 昭和59 527頁  
 (12) 前掲『海国平談』228-229頁

B



二、本多利明の北方への挑戦

本多利明も早くから北方への関心を抱いていた一人であった。天明4年に老中田沼意次は蝦夷地見分計画をたてた。これを知った利明はどんな卑役でもよいから同道したいと奔走した。すでに蝦夷開発への意見を持ち、しかも緯度学という彼の天文学的関心を実地に確かめてみたいという意向もあった。しかし、最後に足軽としての同道が許された時、彼は病気を理由に弟子の最上徳内を参加させた。(この時の徳内の派遣が如何に有意義なものになったかは各側面で顕著であるが別に考えたい。)

本多利明の蝦夷地についての知識は徳内の帰国報告によって拡大されたものであったが、その後一度だけ確かに利明が蝦夷地に挑戦した記録がある。それが享和1年に凌風丸船頭として品川から蝦夷地虫類まで交易を兼ねて出掛けた時であった。

江戸に帰った後に纏めた「航海日記」によると5月8日に房州柏崎出帆直後、向風強く上総国国興津で7日間日和待つという難航が予想される出立ちであった。松部で4日を過ごした後再出発、下総銚子崎犬吠ヶ鼻沖から針路を交え6日5夜を北上した。しかし「(船の)楫の身木短く、船行相狂い…修覆不仕候ては難相手成」<sup>(13)</sup> 状況となって26日「南部宮古にて則船を入れ、翌二十七日より楫修覆仕両日にて出来仕候得とも日和無之日数八日滞船仕六月五日好風を得候」という宮古での修理入港をする状況となった。東蝦夷地に接近しても波とモヤの為にオツケシに入り難く引き返し、悪消への入港となった。ここで明燿200本を陸揚げして、23日に無事根室に着いた。ここで荷物の積み替えをして、要請によって虫類に相回る事となった。更に根室に帰り荷物を1013石を積み、7月16日に江戸をして指して出港した。23日に船を宮古に入れ水主共の休息をさせた。その後日和なく17日間滞船という事になった。上総九十九里浜の

(13) 本庄栄次郎編『近世社会経済学説大系 本多利明集』昭和10 所収 195頁以下

沖にてマギリ風と波濤により難渋して積み荷の「塩漬鱈」を損傷させる事となり江戸への荷物陸揚げを断念して銚子で積み荷処分を企てて、町人に入札させようとしたが損傷酷く一人も望む者がなく仕方無く江戸に向かった。10月9日品川沖に着いた。

全日数150日掛かったこの航海は交易上はとても成功とはいえない経験であった。

この航海中、宮古停泊中利明は「船舶考」を執筆した。

「船舶考」は別名「長器論」と言い「船舶ノ国家ニ長器タル所以ノ事」<sup>(14)</sup>を説いたものと言われている。この困難であった航海の途中でその長器たる船舶に対して如何なる意見を利明は開陳しているであろうか。

彼は先ず、衣食住に係わって三等の段階上げ、都市が一番衣食住の整った段階を示す。次いで関るものがあるのが田舎であり、一番衣食住が関くのが蝦夷地であるとする。かかる三段階の違いがどうして船舶という長器に係わるのかというと、その関く物を運搬して補充しそこを都市化していくのであるという。交易が国家に必須の要件であるのもそのためである。この考えは確かに文明—半文明—野蛮という文明段階説的な考えであって古くはない。<sup>(15)</sup>

次に、船舶はなぜ難破し難船するのかという問題に入る。これについて彼は現今の航海には「沖乗り」と「地回り」との二つがあるが、多くは「地回り」という「(船頭が)我が見馴れたる山々をのみ眼当てとなし土地の周廻に付纏ひ渡海」する方法をとっているが為に颶風に遭い難船するという。これに対して「沖乗り」は「年中颶に遭う事もなく」「怪我もせず」とする。「沖乗り」する事は必須であるという。彼はこの「沖乗り」の方法として、船頭が自分の勘に頼るのではなく「ラクタント用法記」にも記した如く船の経緯度を定め航行すれば安全なのであるという。<sup>(16)</sup>これが「新法渡海」であるという。凌風丸の困難な航海から彼が出した結論なのであるが、凌風丸は外洋で船体の脆弱性から損傷し修復に時間が掛かった点については全然考慮されていない。

また、波濤の為に積み荷が如何に損傷し損失を招いたかについては何も触れていない。外洋航海には船体構造自体の改変が必要であるという認識は残念ながらみられないのである。

ところで、子平と異なって、利明にはこのように外洋航海船自体への注目が意外に見られないし、またそうした船体構造自体の課題が実は夥しい漂流民を生んでいる事、更にはそうした漂流民を保護しそれを送還してロシア他の異国がやって来るという事柄自体についての思想がみられない。利明への北方情報提供者であった最上徳内は、「赤人船渡来の事」で天明6年江良町に停泊したロシア船が「日本船の體にてはな(い)」様子について以下のように述べている。

天明六丙午年四月中赤人大船渡り来り、松前より内海へ入り江良町といふ處の磯邊、三里を離れ碇祝せり。十日計日和待して居たりと。江良町村の者ども、不思議に思ひ、日本船の體にては無く、帆柱三本建て、帆數も多く、吹流等も見へ、土人も大概異國船とは評議せりといへり、此内海は、西方は山丹國より地續き朝鮮國に距る、南方に當ては壹岐、對馬、東方は日本國なり。依て古今の漂流船にも斯の如く異船の渡來せし事なきゆへ、土人の不審するも尤也。……蝦夷嶋々の遠近廣狹は、日本の庶民及び松前の里人もいまだ知る者なし。依てクナシリ嶋より先の諸嶋へは、日本人いまだに渡海せざる土地なれば、見る事は勿論聞ぬ嶋々多し。爰に日本の舶師を稼穡とする者といへども、海上の里程を測量する術を得

(14) 前掲 日本思想大系44 所収 195頁以下

(15) 同上本 塚谷見弘氏の解説

(16) 滝本誠一編『日本經濟叢書12』大正4 所収「船舶考」

たれば、唯遠近を眺望し、空眼にて里程を推量するのみ。依て據とする足らざる事也。徳内赤人に尋問せしに、其術甚捷徑なる法則あり、大洋空中へ漂泊して國嶋の所在方位を知んと欲ば、先我船の所在を知て後其國々嶋々に到る良術にて、晝は干躔に依て測量し、夜は星象に依て測量し、志す所に過つ事なし。其測器、針盤、象限儀あり。又涉海里程綱ありて、其國より彼國に涉海し、又彼嶋より其嶋に涉海する時に里程を測量する綱なり、其綱は、大船の艦に兩車を建て卷置、其大船開帆に臨ば一車の綱を用て水上へ蒔卸しながら颯る也。其綱あり切に到れば代り綱に又一車の綱を蒔卸し、前の綱を車へ卷揚して里程を量て遠近を知り、方位を知て針路を定置き、後涉海するゆへ、涉海に迷惑する事なしと云り。……<sup>(17)</sup>

ここには異国船の形体が日本船と異なるという観察はあるものの、船体自体への注目記事はない。またロシア人イシュヨからかなり異国の地理や風俗さらには日本人漂流者の事を聞いているが、こと異国船自体についてはほとんど聞き出していない。

これは彼らの目や耳がそこになかったという事であろう。(なお、利明の船舶渡海の法に渡海用具として「針盤、象限儀、秒測土圭、天球、地球、垂球、ゼエガルタ、望遠鏡、町見道具、等」を上げているが、これは『元和航海記』の記事を出ない古いものであるという指摘<sup>(18)</sup>がある。この点から考えても彼に新しい西洋の航海法や航海術の知識が乏しかった事が考えられる。)

この点について、北方において外国航海船の見聞や知識、更にはロシア他の異国に関する情報はどのようになっていたのであろうか。

文化4年・1807 ロシア船が千島エトロフ島に出現し武装兵が上陸して警備に当たっていた南部盛岡藩の老砲術師大島治五平は捕らえられる。ロシア船に収容された日本人は10名いたらしいが、樺太でのロシア艦隊の暴行事件の後リシリイ島付近で日本船の伝馬船に8人は移され戻された。この中に治五平もいた。以後ソウヤ、箱館と取り調べられる事になるが、この間の体験、見聞と虜囚の身の私情を後に書き残したのが「私残記」である。『私残記』は公開されたものではなかったが、そこにはオロシャ船の図が明確に記録されていた(別掲C, D)。<sup>(19)</sup>彼の目が如何なる所にあっただかが窺えるのである。

ロシア船の実見という記録では寛政11年・1799から文政5年・1822まで24年間蝦夷地取り締まり御用役であった松田伝十郎の『北夷談』は興味深い。彼はいわゆる捕らえられたロシア海軍軍人グローニンの釈放を受け取りに来たロシア軍艦を見て記録に残している。<sup>(20)</sup>上陸したロシア軍隊の隊形などは記録しているが、船体構造については全然触れていない。勿論、陸上からの観察であって無理もないことではあるが、後のペリー来航時に観察した人々のそれと比較すると大きな違いを感じる。

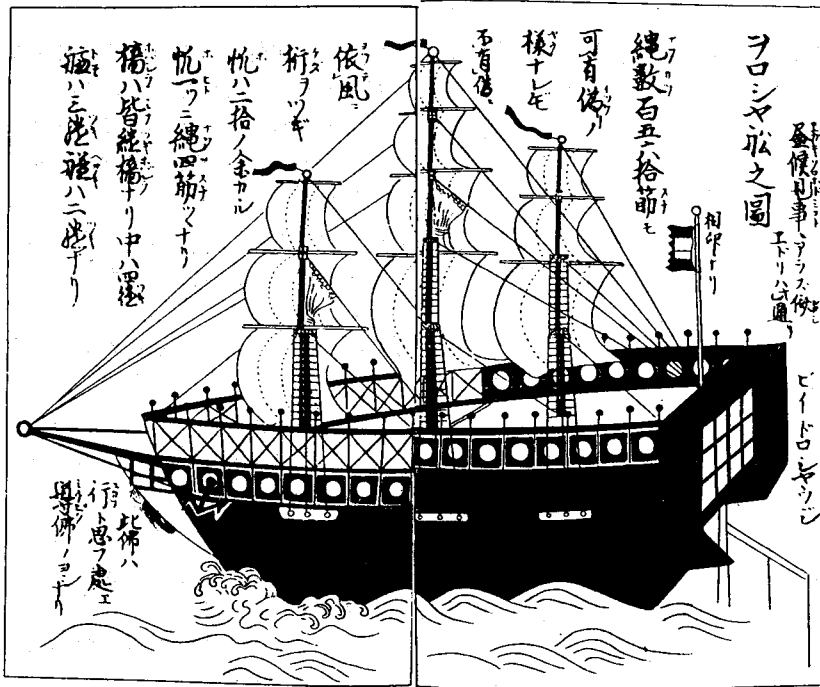
(17) 「蝦夷国風俗人情之沙汰」『日本庶民生活史料集成 4』三一書房 1972 472-474頁

(18) 堀内 剛二著『近代科学思想の系譜』至文堂 昭和39 98頁

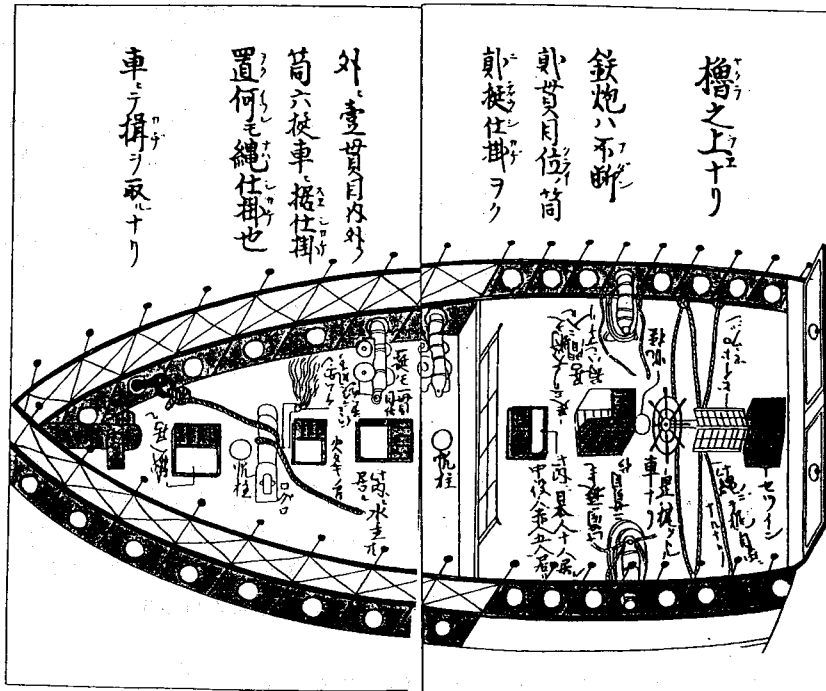
(19) 森莊巳池編『私残記』中央公論社 1991 所収図

(20) 前掲『日本庶民生活史料集成 4』143-144頁

C



D



### 三、崑山、長英における「海船火技」

天保10年蕃社の獄が起こるが、崑山も長英もゴロウニン事件やレサノットの件を知っていた。この北に起こってきた事件と今回のモリソン号の問題とを重ね合わせて考えていた。〔『慎機論』、『戊戌夢物語』〕彼らは異国の日本人漂流民を送還すると同時に日本との交易を求める態度に対して如何に対処すべきなのかという意見を出したのである。その背景には異国の軍事力「英吉利斯は知謀ありて海戦に長じ、鄂羅斯は仁政にして陸戦に長ず…終に内治の害を生ずべし」<sup>(21)</sup>への注目があつた。中でもロシアは「唐山に心ある事」であり、これは当然南から極東に進出してきているイギリスにとっても「急」な問題となっていると認識していた。

「海船火技」とは、先ずイギリスの海軍・軍艦の装備という事になろう。

崑山の受け止めた情報の中でオランダ甲比丹ニーマンからのものは重要なものであつたが、その中に次のような「ストームマシネ」に関する情報がある。

答云、学問芸術の盛なるは独逸国、次に弘朗察にて、余国に比すべきものなし。唯大貌利太泥亜は機巧盛に行はれ、西洋諸国、工匠踵を接し、其都竜動に輻するが故に、他国は機工に事を欠くばかりに候。其国一奇器を製造すれば、大利を得る故に、かゝる風俗となれり。近年……ストームマシネと呼ぶ奇器を創始せり。こは火を以て自から遣る車にして、いとたえなるもの也。我国にても此製によりて、自行火船を工夫せり。成れる事は、いまだ聞不申候。其船は風力を借らずして走るからに、水程を計り、原をあやまる事なきをもて、官の脚船相用ゆべきもの也。之を呼て、ヒュールマシーネと申候。荷物は積かね申候。已にストームマシネと申書有之候。これには其製造委しく記申候。<sup>(22)</sup>

崑山は当今は大ブリテンがヨーロッパの最大の機巧国であつて、ここに西洋諸国の工匠が輻集しているが、その新機巧の中で「自工火船（ストームマシネ）」が最新のものであるという情報は受け、それが風力を借らずに航行出来る有力な発明である事は知っていた。（また、その構造等については文献も出ている事は知っていた）しかし、その建造や防備の具体像を持っている訳ではなかつたようである。

長英の場合も同様であつたと考えられる。蕃社の獄の嫌疑の一つに無人島渡航計画（「外国に航海し、通信せんと」）があり、その取り調べがあつた事について、後に『蕃社遭厄小記』で「イギリス航海の説の起源しる所を尋ね玉ひしかども」<sup>(23)</sup>他に刑の及ぶのを恐れて答えなかつたと述べている。しかし、彼がどの程度イギリス航海の術を知っていたか。外洋航海についての程度の目が及んでいたかは疑問なのである。例えば、『知彼一助』ではイギリス、フランスの軍備を詳細に訳述して特にフランス海軍の艦船の種類も上げているが、その航海上の諸点には触れられていない。

こうした点から考えると、『蕃社遭厄小記』の文明開化期版と目される藤田茂吉の『文明東漸記』は明らかに長英とは違つた洋学史の促らえ方をしている。

それは文明の起点に「火」と「水」を設定し、先ず「火」は火薬、「水」は蒸気を指し、「火」としては小銃伝来大砲の製造までの西洋文明の東漸を述べ、「水」としては蒸気船を設定した。つぎに「石炭ノ火力ヲ以テ走ル快船」動力としての火力水力を見てとつていた。この点は長英にはみられない新しい視点なのである。つまり、崑山、長英辺りでは西洋の技術に対するその優秀性への認識はあつたし、それが政治に反映して進歩派保守派の抗争を生んできたという見

(21) 『慎機論』岩波文庫本『崑山・長英論集』1978 所収 38頁

(22) 同上 19頁 (23) 同上240頁



方はあった。しかし、西洋の技術それ自体に内在する力をもって現実の歴史を把握するという意味での技術史観の構想<sup>(24)</sup>は『文明東漸史』の段階程には強まっていなかったといえよう。蕃社の獄が起った天保10年の翌1840年に清朝と英國の間にアヘン戦争が起こった。この戦争の情報は日本にいち早く伝えられ深刻な危機感を与えた。

この時幕府は、蒸気船の製作ないし輸入をはかっている。

この点について佐藤昌介氏は次のように述べている。幕府は、天保十四年四月にオランダ商館長にたいして、蒸気鐘および蒸気船について、「蒸気鐘、蘭語ストーム〔マシネ〕、蒸気船、蘭語ストーム〔ボート〕と申品、山海之運行自在之制作ニ而、近頃イギリス杯ニ而者、別而精巧工夫も盛ニ相成候由」といい、長崎在留のオランダ人の中で、これを製作できるものがあるのか、また長崎において製作が困難なばあい、それらをオランダ本国から取寄せることができるのか、長崎でそれらを製作した場合の経費、および本国から取寄せたばあいの経費を、蒸気鐘および蒸気船のそれぞれに分けて見積り、またこれらを長崎で製作したばあい、海路、江戸に輸送するに要する経費を見積もり、おおよそのところを報告するように命じている。もうにアヘン戦争を報じたオランダ別段風説書の中に、すぐれた性能をもつ火砲の威力とならんで、新鋭の兵器である武装蒸気船の活動が記されていたことが、幕府の注意を喚起し、いずれは予想される英艦隊の日本渡米に備えて、わが国でも蒸気船をもとうとしたものであろう。もっとも右の幕府の質問にたいして、オランダ商館長ビッグは、蒸気鐘について「此器は水を入れ、蜜閉いたし、其水の濃沸にて蒸気を散出し、右器に附属いたし候諸道具ニ相用ひて、蒸気船蘭語ストームボート 或は蒸気車 蘭語ストームワーケン 等海陸運行いたし候」、また蒸気船については、「蒸気鐘、其外諸道具の方便をもて、逆風にも逆風にも海上自在に進退いたし候ものに御座候」と説明を加え、ついで長崎においてこれらを製作することは困難であるといひ、またオランダ本国から輸送することが果たして可能かどうか不明であり、その価格についても思いつかないので、この秋に帰帆する蘭船に託してバタビアに問いあわせ、翌年、定期船が長崎に来航したうえで、詳しく返事をするかと答えている。……もっとも幕府は、蒸気船の購入をかみならずしも急いでいたわけではない。会所調役福田源四郎は御用方通詞中山作三郎に「来年持渡ニ不及、用具等一切取揃、一体取調子、来夏可申聞、御奉行様より御達之趣」があったことを告げたので、作三郎は商館長にこの旨を伝達している。それはともかくとして、武装蒸気船の購入を幕府が計画したことは、アヘン戦争のもたらした対外的危機を幕府がいかに深刻にうけとめていたかを物語るものである。<sup>(25)</sup>

ところで、文化・文政から天保という時点で見ると北方に関係する洋学的思想家として秋田藩の佐藤信淵がいる。彼は嘉永3年に82歳で病没しているとの事であるが、すでに天保11年の段階で高齢を理由に南部盛岡藩の財政改革顧問招聘を断って子升庵・信昭を以て仕えさせたという。南部盛岡藩の洋学に重要な働きをした新宮涼庭の来盛と南部藩医八角宗律、飯富了吾の京都遊学、更には帰京を信淵が待っていて南部事情を聞き涼庭の推薦もあって南部財政顧問を仰せつかったという事情等については既に拙稿<sup>(26)</sup>で述べているのでここでは省く。

ただ、信淵の膨大な著述の中にこの論稿で問題にしている諸点はいかに促えられているかに

(24) 『蕃社遭厄小記』と『文明東漸史』については、拙著『日本生活思想史序説』ペリかん社 1982

242頁以下でも論及したが、両書の間には同質の性格と異質の性格があるものと考えられ、異質の性格の大きな部分の一つがここで指摘する技術史観の違いであろうと考える。

(25) 『洋学史の研究』中央公論社 昭和55 358頁以下

(26) 「八角宗律と江幡春庵」『岩手史学研究71』岩手史学会 昭和63

触れておきたい。

彼の經世論の中に「海舶運送其の便利ナルコト万国ニ殊絶」という点があり、「經濟ノ要務」をもって改革する視点があった。これは本多利明に通ずるものである。また、「皇国」に隣接する「支那」の我が国に「寇スル」事を問題にする点においては林子平に通ずるものがある。彼には更に日本は支那を攻略し易く「支那ヲ版圖ニ烈スルノ上ハ其西域、シヤム インド」などは日本に帰順するであろうというアジア攻略プランが構想されていた。<sup>(27)</sup> これは林子平にはないものであった。

興味深いのは、南部や青森は北から黒龍江を溯り、金沢や松江は日本海側から沿海州に攻撃をかけ兩派は盛京（奉天）で合流し北京を目指す。一方熊本は東シナ海を渡って南京を攻略するというものであった。かかる軍隊の養成しとして陸軍府と水軍府の下に訓練機関を設ける構想を立てた。

更に彼は、こうした海外進攻の軍用船自体についてはいかに考えていたのであろうか。『存華挫狄論』（嘉永三年三月十日 盛岡八十三老翁 佐藤 淵）との序<sup>(28)</sup>があるがこれも疑わしく信淵自信ではあるまい。）には「ストームボート」・「早船」・「火輪船」が石炭を焚いて蒸気を起こしそれで外輪を回し航行する事を明記している。しかし、実際に自らの工夫という「自走火船」は火薬を退走砲に詰めその爆発力で走る火船連で火輪・敵艦目がけて突進し爆発炎上させるというものであった。

大艦とその構造への認識というには距離があったようである。 （1993年9月1日受理）

(27) 奈良本辰也，松浦玲編『先駆者の思想』徳間書店 1966 336頁

(28) 『佐藤信淵家学全集下巻』岩波書店 昭和2 所収 863頁